

## 韓国で学んだ茶道

宮崎公立大学三年（宮崎県）

## 田尻 美和

茶道とは人と人とのつながりを作り出し、発展させていくものだと考える。そして、そこに十分な言語は必要ないことをこの夏学ぶことが出来た。

私は二〇二二年二月から八月にかけて韓国に留学をしていた。半年間という短い時間ではあったが、とても濃い経験をする事が出来た。その中の一つが韓国での茶道体験だ。近年は新型コロナウイルスの影響で日本の大学において海外留学生との交流の場が設けられなかった。新型コロナウイルスの感染が拡大する以前は大学、礼法きもの部、そして私たち茶道部とで協力し、留学生に浴衣を着てもらい茶道を体験していただくという場を設けていた。二〇二〇年からは留学生の受け入れが停止し、それに伴い、それらの活動はすべてオンラインに移行した。オンラインでしか得られない経験もあったが、やはりオフラインでの茶道体験、異文化交流を楽しみたい気持ちが私の中で大きかった。

た。そんな中、韓国への留学という大きなチャンスを得ることが出来た私は、この機会を逃さないために韓国で茶道が学べるところを検索し、「裏千家ソウル出張所」と連絡を取ることが出来、五月に裏千家ソウル出張所にお邪魔させていただいた。

私が体験に行った日は先生がお二人で指導されていた。久しぶりの畳の匂い、お茶室、お抹茶に胸を躍らせながら景福宮のそばにある稽古場まで足を運んだ。ソウル出張所での体験は驚くことばかりであった。私が到着するとすでにお稽古が始まっていた。その部屋はビルが建ち並ぶ都会にあるとは思えないほど畳の匂いに満ち、落ち着く空間であった。入ってすぐ右手にはつくばいがあり、日常から切り離された空間であるということを意識した。先生は韓国人であったため、先生とのお話は日本語半分韓国語半分で行った。その体験も特別なものであった。学習中の言語を使って学ぶ茶道は同じものでも違うもののようにあり、今まで学んできたものではあるが、環境、先生、言語が違ふとこんなにも感じ方が違うものなのだとということを感じた。しかし、その根本にあるものは同じで、茶道を通して実際に人と繋がっているということを実感できるいい機会であった。先生のお話によると、ソウル出張所では生徒さんが六五名おり、私が体験に行った金曜日だけでも午前と午後に分けて十名の生徒さんのお稽古をしている

とのことだった。その日は、立礼と茶箱のお稽古をしていた。月ごとに学ぶお点前を変えているそうだ。ソウル出張所は話を聞けば聞くほど工夫の感じられる場所であった。お菓子もコロナの関係で毎回京都から取り寄せるのは難しくなってしまったため、生徒さん手作りのお菓子を使用する日もあるそうだ。実際に私が頂いたお菓子も、生徒さん手作りの枝豆を使用した五月の新緑を感じられる綺麗な緑色の大福であった。また、私が見学させていただいた日は初風炉の時期で、たけのご飯までごちそうになった。おもてなしの精神を深く感じた体験であった。

これまで学校茶道しか体験したことのない私にとって裏千家ソウル出張所での体験は特別なものであった。そして、茶道を学びたいという気持ちは年齢、国籍関係なく存在し、行動に移している人がたくさんいることを感じる事が出来た。私はこれまで、先生である小牧宗芳先生から中国で茶道を教えていた頃のお話を聞いて世界で茶道を学ぶことに憧れを抱いていたが、その日その憧れが現実になったことには感慨深いものがあった。韓国という地で学ぶ茶道、韓国語で学ぶ茶道という中々できない体験をした私だからこそ、茶道には国境はなくみんな同じなのだと思身をもつて学ぶことが出来た。この体験を伝えるとともに、機会があれば違う国でも茶道体験をしてみたい。